佳作

行動の感動が進む

宮崎県 宮崎県立宮崎大宮高等学校一年　日髙 雄裕

三週間という短い夏季休業中に、私は吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』を読みました。映画も上映されている中、未読で皆に小説で読むことを強く勧められたため、避けていた難しそうな本のコーナーに初めて行きました。ここからは、『君たちはどう生きるか』を読んだ感想とその後の行動の変化です。

私が特に印象に残っているのは、コペル君が正月の約束を破ってしまったことです。その約束は「先輩に友達が殴られそうだったら皆で殴られる」というものです。これは、コペル君、北見君、浦川君、水谷君と水谷君の姉、かつ子さんの間で結ばれたものです。当時のコペル君達の学校は、先輩達が「治安が悪い」「下級生のくせに生意気」と平気で暴力をしていました。そんな中でコペル君の大切な友達の北見君が先輩の作っていた雪だるまを、そうとは知らず本当に事故で壊してしまったのです。正月の約束通り、水谷君と浦川君は先輩に絡まれている北見君の元へ。しかし、コペル君はそこへ行けませんでした。その場にいたのに。先輩が、

「こんなかにゃあ、まだ北見の仲間がいるんだろう。いるんなら、出て来いッ。」

と言ったのに、です。その後は先輩が次の始業ベルまでコペル君を除く三人を殴りました。コペル君は三人がその場を去った後も雪の中で呆然としていたので風邪をひいてしまいます。コペル君のお母さんや叔父さんのアドバイスで北見君達に謝罪しようと手紙を書きました。数日後には元通り仲良し四人組に戻りました。ここまでが特に印象に残りました。正直に言えば、私も助けに行くと思いながらも行けなかったと思います。そして、病気が治ったら病気のせいにしていたのかもしれません。お母さんや叔父さんのアドバイスを聞いたとしても実際に行動に移せていたかどうか。私は、約束を守ることの大切さも謝ることの大切さも知っています。いや、もしかすると知っていたつもりになっていただけかもしれません。また、口で言うのは簡単で、行動に移すことが難しいことも。だから、自分のことを卑怯者と感じ後悔しているコペル君を見て、普通の人よりも胸に込み上げてくるものが多く、考える時間も長かったのだと思います。私は自分の認識を改めて生きていくことに決めました。「知る」だけではいけない本質が世の中にはあると思いました。

私は「人助け」が苦手です。いや、苦手でした。人見知りをしてしまうのも大きいですが、助けようとしても逆に迷惑と感じる人もいるのではないかと考えてしまっていたからです。しかし、私の価値観は大きく変わりました。迷惑と捉えるか否かは結局助けられた人次第なのだから、やるだけやってみようと思えるようになりました。今日、お婆さんが、学校の近くの長い横断歩道を重そうな荷物を持って渡ろうとしていたので思い切って声を掛けました。自分から声を掛けるということに不安と妙な期待がありました。

「あの、荷物が重そうでここは距離が長くて危険だと聞くので声を掛けさせていただきました。もし荷物が重ければ僕が運びましょうか。」

「ありがとうね。それじゃあお願いしようかな。」

そう言って渡されたのはズシリと重い買い物袋。恐らく五キログラムは超えていると思います。何故ここまで重いのか聞くと、お孫さんが出張で宮崎に来ていて、仕事で忙しいと思うから張り切ってたくさん料理を作って、お孫さんに笑ってほしいそうです。その後、横断歩道の少し先まで一緒に行き、ここまでで良いと、ありがとうと言われたため、そこで別れました。不思議と人を助けて「あげた」ではなく人助けをしたということが頭と心に残りました。

「一冊の本で人生が変わる」。そんな言葉がテレビの広告や、本のポップに書かれていたりします。今までは、そんなことがある訳無いと思っていました。大方それは合っていると思います。しかし、本を「読む」だけでは何も見えないのだと思います。きっとその本を読んだ後に自分がどう思ったか、考えたか、行動したかが大切なのでしょう。「君たちはどう生きるか」。まだ、この答えは自分の中で見つかっていません。しかし、人助けをした今日、一歩進めた感動は少しだけ私のこれからの生活を助けるに違いないでしょう。